

## 平成20年度 第5回 市史を読む会 「三田藩の公議人」について

平成21年2月14日（土）、まちづくり協働センターにおいて、関西国際大学非常勤講師の三村昌司さんを講師にむかえて第5回市史を読む会が開催されました。今年度の市史を読む会もこれで最後になります。

みなさん、公議人をご存知でしょうか？ 明治元年（1868）12月、新政権の政治方針などに関する議事機関として、東京（明治元年7月に江戸から東京に改称）に公議所が設けられました。そこに各藩から一名ずつ代議人として出席したのが公議人です。三田藩からも家老であった九鬼求馬（後に伊織と改名）が出席しているのですが、残された書簡をみると、どうも出席に乗り気でない様子…。どうしてなのでしょう？今回は書簡から見えてくる公議人の暮らしや心情についてお話いただきました。ちなみにこの書簡は現在の旧九鬼家住宅資料館から見つかったもので、九鬼求馬は住宅の設計者である九鬼隆範の義父にあたります。



九鬼求馬の母への書簡

本題に入る前にまず公議所が設置される背景をみておきましょう。公議所が設置される前年の慶応3年（1867）10月、徳川慶喜は政権を朝廷に返上し、その後王政復古の大号令により将軍職辞退などを承認します。しかしこれですぐに新体制に移行できたわけではなく、新政権は旧幕府・佐幕派勢力と明治2年まで戊辰戦争などで戦います。公議所の設置はまさに戊辰戦争の最中で、政権はきわめて不安定な状態にありました。慶応4年3月、「広く会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ」という条文からはじまる五箇条の御誓文が出されますが、公議所の設置はこの五箇条の御誓文をうける形でなされました。ただし公議所は現在の国会のような立法機関ではなく、あくまで政府に対する建議機関でした。

このように明治初年の重要な機関であるにもかかわらず、公議所の研究はこれまで十分にされてこなかったそうです。公議所や公議人に関する史料がほとんど見つかっていなかったのも大きな理由でした。しかし、三田市史を編さんする過程で公議人に関する史料が九鬼家資料の中に多く含まれていることがわかりました。これは全国的にみても大変貴重だということで、三村さんを中心に、代表的な史料を『三田市史』第6巻近代資料Ⅱに掲載していただきました。

さて、九鬼求馬が公議人に選ばれた当初、求馬はそれを嫌がり、仮病を使ってまで出府を逃れようとします。家族に宛てた書簡では「実ほうそ之病氣にて」などと明かしています。このように求馬は当初公議人をつとめることに乗り気でなかったのですが、結局出府し公議人をつとめます。そして公議所では廃刀論やキリスト教容認など急進的な意見を述べ、その急進性から他藩の公議人から強い反発にあいます。すると求馬は「藩辱」をうけたとして自主謹慎し、藩は謹慎は無用だと申し渡しますが、求馬は家禄を辞してもよいから公議人を辞職したいと申し出ます。そして明治2年10月にその申し出は受理され、名も求馬から伊織に改名します。

三村さんによると、当初求馬が公議人を嫌がったのは金銭的な問題が大きかったとのこと。他の公議人との付き合い（史料には「公議人之遊び」とある）など、多くの出費が予想されたためです。公議人は藩でも家老クラスの人物である場合が多く、九鬼求馬の家もまたそうでした。しかし、上級武士でさえ家計が苦しい当時の三田藩の状況があったのです。

また、先述のとおり求馬は公議所で急進的な意見を述べ反発に遭います。しかし、当時藩内でこのような急進的な意見を主導したのは白洲退蔵や小寺泰次郎らと考えられ、必ずしも求馬の持論ではなかった可能性があるとのこと。求馬は公議人を辞めたいと申し出ますが、そこからは、藩論と公議所の意見の間で板挟みになって苦悩する姿がみてとれるとのことでした。

計5回にわたって史料を読み、受講の皆様とともに三田の歴史の一端を考えてきましたがいかがでしたか？難しいこと、疑問が残ることもあったかもしれません。しかし特にお伝えしたかったのは、多くの発見が隠されている歴史資料は大変貴重なものであるということです。発見とは先人の喜びや苦しみ悲しみのことです。近代の史料は容易に読めるものもたくさんありました。是非、今度は皆さんが先人の声を探り当ててください。その声は我々の暮らしに、色々な教訓や知恵を授けてくれると思います。来年度も同様の講座を企画しておりますので奮ってご参加ください。（三田市史編さん担当）